

右書面之趣可被得其意候。以上。

（寛保元年）
辛酉九月四日

本多安房守
横山大和守

御 本 丸 御番人衆中
 本 丸 御番人衆中
 薪 丸 御番人衆中
 土 橋 御 門 御番人衆中
 七十間御長屋御門御番人衆中
 橋 爪 御 門 御番人衆中
 金 谷 御 門 御番人衆中

覺

一、於御城中、若喧嘩口論其外急切之儀有之刻者、二之御丸當番之頭中并御横目迄、即刻斷可被申候。尤定番頭・同御番頭・拙者共方之茂早速可被申聞候。勿論其頭・支配へ茂可被相達事。

一、鎖口御番御徒、於御番所急病人有之刻、不依晝夜、是又二之御丸當番之頭中迄相斷、頭中指圖次第、御門之内に

乗物を入、御番所より乗物に而可相返候。乍然相番に申遣、替之御番人呼請、御番所明申聞敷候。夜中に候はゞ、翌日之御番人に申遣、加番待請、本番人と二人に御番所相渡可罷歸候。勿論右之趣、定番頭に茂申達候様可被申渡事。

右書面之趣可被得其意候。以上。

（寛保元年）
辛酉九月四日

本多安房守
横山大和守

長瀬五郎右衛門殿
杉江左衛門殿

覺

一、於御城中、若喧嘩口論其外急切之儀有之刻は、其御番所より二之御丸當番之頭中并御横目迄、即刻斷可申候。尤定番頭・同御番頭・拙者共方へ茂早速可被申聞候。勿論其頭・支配にも可相達事。

右書面之趣可被得其意候。以上。

辛酉九月四日

本多安房守
横山大和守

會所御土藏御番人中

覺

一、於御城中、若喧嘩口論、其外急切之儀有之刻は、二之御丸當番之頭中并御横目迄、即刻斷可被申候。尤定番頭・同御番頭・拙者共方之茂、早速可被申聞候。勿論其頭・支配にも可被相達事。

一、於御番所急病人有之砌、不依晝夜、是又二之御丸當番之頭中被相達、頭中指圖次第、御門之内に乗物を入、御番所より乗物に而可被相返候。乍然相番に申遣、替之御番人呼請、御番所明被申聞敷候。夜中に候はゞ、翌日之御番人へ申遣、加番待受、本番人と二人に御番所相渡可被罷歸候。勿論右之趣定番頭・同御番頭へ茂可被申入事。

（寛保元年）
辛酉九月四日

本多安房守
横山大和守

金谷御廣式鎖口御番人衆中

右之通所々御番所へ書出遣置候。若於御番所、喧嘩口論其外急切之儀并急病人有之刻は、各迄可相斷候條、様子被聞届、可被達御聽儀者早速可被申上候。急病人有之、歩に而罷歸候事難成候はゞ、被相伺、被仰出次第、御門之内へ乗物を入、可被相返候。替之御番人罷出候様に被申渡、御番所明不申様可被裁許候。以上。

（寛保元年）
辛酉九月四日

本多安房守
横山大和守

二之御丸當番頭衆中

六 御城門閉鎖後通行之儀御定

覺

一、夜四に御門を立、往來留可申候。但、外より用所候而入候ものは、對馬・河内・因幡・宮内・民部五人之内手形を以可相通、内より出候者は、焼印札與力番所に而改、請取置可相通事。

一、同御門を立、内より出又立歸候者は、兩印之札を以相通、罷歸刻右之札與力番所に受取置、毎朝歩行小頭札數改